



沖縄国際大学 FD通信

沖縄国際大学 FD委員会／企画・調査小委員会 2010年6月16日発行

『教育支援者(TA・SA)』特集 第1弾 「相談援助演習」のSA活用事例

組織的FD活動の一環として、2010年度から始まった教育支援者(TA・SA)制度がスタートして約2ヶ月あまり。

多くのSAを採用している人間福祉学科の授業から、今回は、「相談援助演習」(比嘉昌哉・准教授)の授業を紹介し、実際にSAを活用している教員、SAとして活動している学生の「生の声」をお届けします。



ソーシャルワーカーは、その人自身がツールでなければならない。—自己覚知—

「相談援助演習」は、社会福祉士国家試験受験資格を取得するために必要な科目で、社会福祉士を目指す学生が受講しています。

授業では、社会福祉士に求められる相談援助に関する知識、技術、価値観について、実践的場面を想定しながら習得することを目指しています。

授業はゼミ形式で行われる学生参加型の授業で、17名の学生(男4名、女13名)が受講していて、今回の授業では、次の流れで行っていました。

今回の授業におけるSAの役割は、グループ学習の輪の中に入り、積極的な意見が出るよう促すことでした。



- 1) ワークシート配布、出席確認
- 2) ワークシートを作成 (*予習していることが前提)
- 3) 3グループに分かれ、ワークシート内のテーマ「身近な人権から考える」について、ディスカッション。

*担当教員は、適宜、巡回し、各グループで活発な意見交換になるよう助言を行う。

- 4) 担当教員による説明、解説

ワークシートのテーマから、現代社会に存在する問題へつなげ、学生の学びを促進する。

授業の中で、「**ソーシャルワーカーは、その人自身がツールでなければならない**」と強調していたのが印象的でした。後でその意味を伺うと、「心理カウンセラーだったら、様々な実験法、医者だったら様々な検査を用いて、サポートするのだが、ソーシャルワーカーの場合、そういった手法を用いることはない。ソーシャルワーカー自身が、サポートを必要とする人の道具にならなければならない。その場合、実験や検査を通じてのサポートではないことから、自らの価値観や感情を持ち込むことは、問題の状況を誤って判断することに結びつく。そのため、ソーシャルワーカーは、自らを知り、コントロールする『**自己覚知**』が必要となるため強調している」とのことであった。「自己覚知」は、ソーシャルワークの現場において、とても重要で、この授業を通じて、学生が「自己覚知」していくことに期待したい。

『やりがいと難しさを感じています。』 (SA: 仲宗根維子さん)

Q1: 現在の学生生活についてお聞かせ下さい。

これまでにアメリカンスクールで2年間ボランティア活動を行ってきました。具体的には、週1回、日本語スタッフのボランティアをやっていました。その中で、アメリカンスクールの子ども達ともふれあいにやりがいを感じてきました。また、教職課程を受講しているので、アメリカンスクールでの英語と日本語の二カ国語教育に興味を湧いています。



Q2: どうして、SAになろうと思ったのか?

アメリカンスクールでのボランティア活動の経験や夏休みに地元での放課後児童教室でのボランティア活動の経験から興味を持ちました。また、今後の教職課程を学んでいく上で活きると思いました。

Q3: 授業では、主にどういったことをしているのか?

授業前には、資料準備、授業計画の打合せなどを行っています。授業では、主にグループ学習の輪に入って、ディスカッションをサポートしています。授業後、比嘉先生から「学生の反応について」必ず聞かれます。そこで、常に振り返り、今後の授業に活かすように努めています。



Q4: SAを経験してみたの感想は?

学生から質問が来るとうれしいです。また、それに上手に答えることができると、やりがいを感じます。しかし、この前、アイスブレイクを実践したのですが、なかなか上手くいきませんでした。授業における導入部分の難しさを実感しました。この反省を今後を活かしたいです。

Q5: SAでの経験を今後の学生生活にどうつなげますか?

比嘉先生を見ていて、クラス全体をよく見ているなど感じました。やりがいと難しさを感じています。教職課程も受講しているので、SAの経験を通じて人に伝えることの大切さを学びたいです。今後も教育現場をもっと見ていきたいので、学びやすい環境作りとは何かを考えていけたらと思います。また、社会福祉士の国家試験にもパスしたいですし、ボランティア活動や留学など色々トライしていきたいです。

『質向上のために活用してみたいはいかがでしょうか。』 (比嘉昌哉・准教授)

Q1: SAを活用して、授業に変化はありましたか?

まだ見えない部分はあるのだが、年齢の近いSAというサポーターがいることで、直接教員に聞きにくい事でも、SAに質問することで授業の活性化が図れるメリットができた。この場合、SAと学生のみでのやりとりでは、逆効果になるので、もっと連携を密にしながら、学生の意見をくみ取っていける体制を構築したい。



Q2: SAを活用する上で、心がけていること、工夫はありますか?

事前・事後の打ち合わせが大事だと感じています。教員と同じようにアドバイスする場面もあるので、どういったアドバイスが学生にとって効果的かを事前に打ち合わせている。また、授業後は、「学生の反応はどうだったか?」を常に意識的に聞いていて、SAから見える学生の姿を聞くことで、今後の授業に活かしていきたい。

Q3: 教育支援者制度についてのメッセージを下さい。

この制度は、「教員がラクになるためのものではない」ことは、常々意識しています。現在の大学教育は、質が問われています。学生は高い学費払って大学に来ているので、それに見合った授業を提供する義務が我々にはあります。しかしながら、年々大学教員は多忙になってきている現状です。大学教育の質を担保するための一助として、教育支援者制度を有効に活用することができると思います。意欲ある学生を活用し、授業の質向上のために活用してみたいはいかがでしょうか。



Q4: 今後の本学におけるFD活動について要望はありますか?

教育支援者制度などFDの良さが浸透していくと、今後、予算などの運営面の問題が発生するのではないかと懸念しています。そうなった場合、これまで活用できたことができなくなるなど、授業運営に支障が来すのではないかと心配です。もし、そうなった場合でも、継続性を第一に考えた制度設計をお願いしたいです。